7 おわりに

イギリスの歴史家E.H.カーは、歴史を「現在と過去の尽きることのない対話である」と定義している。現在を生きる我々が、直面する課題を主観的・主体的に捉えた上で過去の事象を見つめ直すこと（対話すること）で、新たな学びや気づきを獲得することが期待されている。

本市の50年にわたる環境への取り組みを概観する中で、時代ごとに直面した環境課題に対して、①技術的・政策的なイノベーション、②多様な主体の協働連携による実践、そして③環境と産業の共生を目指す都市ビジョンを施策形成・実施における軸としながら、様々な環境課題の解決に向けて取り組んできたことに改めて気づかされる。そして、地球的規模での取り組みが求められている気候変動対応や脱炭素社会の実現といった今日的課題に対しても、「イノベーション」「協働連携」「環境と産業の共生」という川崎市の環境施策を形作ってきた３つの軸は、引き続き有効であると考える。

過去に学びながら、「豊かな未来を創造する地球環境都市かわさき」という本市環境基本計画が目指す環境像の実現に向けて、次の50年を見据えたさらなる歩みを進める必要がある。

コラム

50年前の川崎市役所にタイムスリップ
中島 幹夫さんに聞く①

昭和35（1960）年に入庁され、平成10（1998）年に退職された中島さんに編集部が当時のお話を聞きました。

中島 幹夫さん

― 50年前の市役所について教えてください。

（中島）私は職員局事務管理課で組織の統廃合を担当していました。昭和46年に就任した伊藤三郎市長からは、公害から青い空を取り戻し、市民中心のまちをつくるため、公害局、市民局、さらに市全体のことを考える中枢機能として独立した企画調整室を作るように指示がありました。実は川崎市は以前から保健所や福祉事務所、人事委員会を設置し、県とほぼ同等の機能を有していましたので、指定都市移行により区役所や児童相談所などができましたが、内部の混乱は少なく、とてもスムーズな移行ができたことを記憶しています。

― 職員の意識に変化はありましたか。

（中島）当時は、10大都市に肩を並べる自治体になったという自信や誇りを持つ職員が多かったです。競輪競馬などが盛んで市税収入も増え、川崎市全体が発展し豊かになっていく実感があったので、大変やりがいを感じていました。

― 仕事道具も大きく変化があったと思います。

（中島）新人は手書きの文書を清書する仕事を任されましたが、私は苦手でした。タイプライターを使う場合は専門のタイピストに依頼していましたので、ワープロが導入され、職員自ら打てるようになったのはまさに革命的でした。所属に1台しかないワープロをみんなで取り合ったのを覚えています（笑）。

― 現在の川崎市をどうご覧になっていますか。

（中島）私が最も思い入れのある仕事は都市憲章ですが、これは後の自治基本条例につながりました。また、川崎、鹿島田、溝の口のマスタープランづくりに関わりましたが、その頃に描いていたことは現実になりました。川崎アゼリアに至っては「あんなに大きな地下街ができるわけない」と言われたくらいです。仕事の質が大きく変化し、職員数も少ない中で実現に尽力してくれた後輩のみなさんに感謝しながら、川崎に来るたびに感慨にふけっています。